

旅の道連れ、できました。

旅の荷物が“お荷物”にならないよう、軽く使いやすいハードキャリーをつくりました。本体に、ポリカーボネートを80%、ABS樹脂を20%の比率で使用して、軽さと強度を実現。バーの高さを自由に調節できますので、背が高い人も低い人も、2輪で引くときも4輪で押すときも、スムーズに転がせます。上面は、他の荷物を安定して載せやすいフラットな形状。人それぞれの使い方ができるよう、内装は基本装備に徹して、仕切り板やインナーバッグなどはオプションでご用意しました。



キャリーバーの高さを自由に調節できるハードキャリー・56L

幅45×高さ68×奥行23cm (ハンドル収納時)
幅45×高さ105×奥行23cm (ハンドル最大伸長時)
[8841141] 黒 [8841158] グレー [8992678] カーキ

税込 15,000円

キャリーバーの高さを自由に調節できるハードキャリー・72L

幅48×高さ73×奥行26cm (ハンドル収納時)
幅48×高さ105×奥行26cm (ハンドル最大伸長時)
[8841165] 黒 [8841172] グレー [8992683] カーキ

税込 20,000円

MUJI to GO

MUJI to GOは無印良品の全商品から旅・移動・ビジネス・学習・遊びに役立つアイテムをぎゅっと凝縮した厳選ショップです。便利な機能付きの文具や旅行が楽しくなるグッズ、普段の暮らしをそのまま持ち運べるものなど空港や駅で出会うとうれしいアイテムが揃っています。 www.muji-to-go.com/ www.muji.net/shop/ (取り扱い店舗)

くらしの良品研究所とは

「くりかえし原点、くりかえし未来。」を合言葉に、これからの時代に求められる良品像を、みなさんと一緒に探っていく“ラボラトリー”です。店舗とインターネットを介して、生活者であるお客さまと対話しながら、既存商品を点検し、新しい商品を育て、世界のより多くの人々に「これでいい」と共感していただける、感じいい暮らしのかたちを考えていきます。

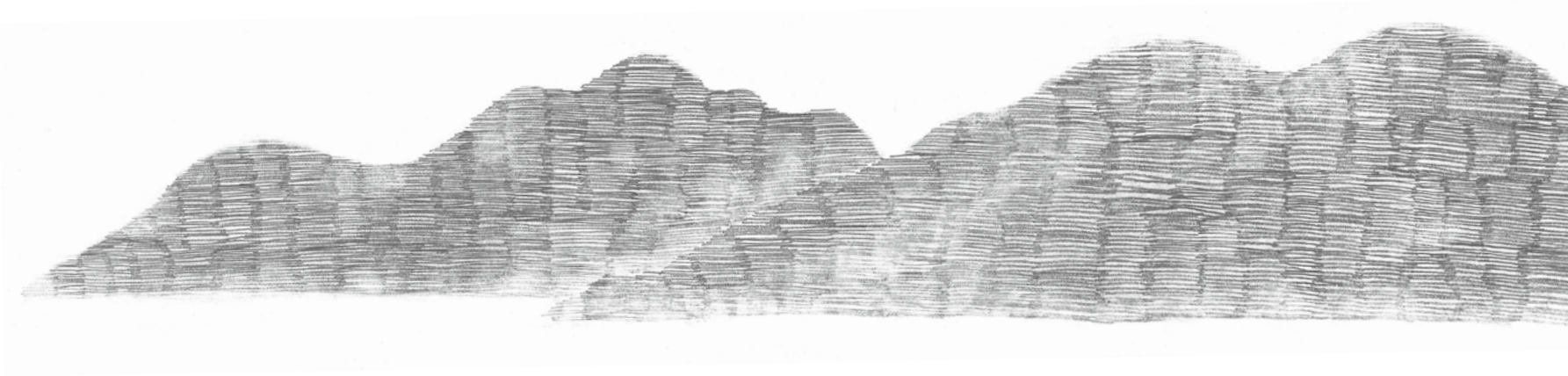
◇この小冊子は、背表紙に付いた2つのリングをファイルの穴に通して、ストックすることができます。

facebookを利用して、読者のみなさんからのコメントやご意見を公開。ユーザー同士のご意見交換も可能になり、たくさんのご意見を共有できるようになりました。

www.muji.net/lab

no.04

旅をめぐって



無印良品

くらし中心

時代を行き来したいと思ったら、地球を水平に移動すればいい、と言った人がいます。あるところでは急激に高度成長した過去の日本の姿を目の当たりにし、またあるところでは、これからやってくる成熟した都市の姿を見ることができるでしょう。旅は、人を過去にも未来にも運んでくれるタイムマシンのようなものかもしれません。旅のもうひとつの魅力は、知らないものや忘れかけていたものとの出会いです。自然や町並みの美しさ、異国の文化、人のやさしさ、風のおいなど。旅という装置の中では、初めて体験することだけでなく、日常の中で忘れかけていたことも、新鮮な思いで見たり感じたりすることができるのです。そして、どんなに綿密に計画しても、思いがけないことが起きるのが旅。人生がよく旅にたえられるのは、旅と同様、計画通りには運ばないものだからでしょう。そんなハプニングさえも楽しむ気持ちになれば、旅の面白さは、より深まっていくのかもしれません。あなたのしたい旅は、どんな旅ですか。





季節や行き先に合わせて、数枚の布を選ぶ。必ず持って行くのは、刺子。温かいし、ディナーの席に羽織っても似合う。

旅を求めるというより、旅の先にある何かを求める。

人、自然、異文化…旅は、私たちに未知のものを見せてくれます。それはきっと、新しい世界への扉。旅のもたらすさまざまな出会いを生かして、人とのつながりや活動の場を広げてきた小池さんに、お話を聞きました。

国内旅行を入れると、年に数回から10回以上も旅をするという小池さん。仕事柄、展覧会や美術プロジェクトなどの旅も多く、海外に部屋を借りて長期滞在することもあるといいます。旅を通して多くの人とつながり、刺激を受け、そこからまた新しい扉が開いていく。そんな蓄積が、現在の小池さんの幅広い世界を形づくっているようです。

きっかけは、ロンドンへの旅。

小池さんがロンドンに通い始めたのは、まだ若いコピーライターだった1960年代。SWINGING LONDONと言われたほど文化風俗が華やかで、「怒れる若者たち」と呼ば

れた世代が演劇を革新していった時代です。初めて行ったときから、「この街、私に合う」と直感した小池さん。大学で演劇を専攻していたこともあって、演劇を観に行く目的で、お金を貯めてはロンドンの劇場に通ったといいます。そんな中で、スタイリストやカメラマン、編集者など、多くの友だちがで、その友だちからまた新しい友だちへと人の輪が広がっていきました。当時のロンドンは、フラワーチルドレン(ヒッピー)が街を闊歩し、POPミュージックやPOPカルチャーの生まれた時代。ファッションの坩堝(るつぼ)でした。小池さんが、ロンドンのファッションを文章にして紹介し始めたのも、このころ。こうした活動は、やがて「流行通信」



「ダッカの霧」といわれ再現が望まれた超極薄の有機綿織物。日本で誕生。

創刊と執筆につながり、数多くの展覧会やプロジェクトへもつながっていきました。ロンドンへの旅は、その後の小池さんの仕事を方向づけたと言えるかもしれません。

「布」を連れて、旅に出る。

小池さんが旅に出るとき必ず持って行くのが、数枚のストールです。暑い国では汗拭きになり、クーラーの効きすぎた機内やホテルでは保温になり、木綿素材ならタオルの代わりにもなります。それを羽織れば普段の服をドレスアップさせることもできるし、ホテルの椅子やベッドの上にふわっと掛けるだけで、なごみの空間をつくることもできる。そんなストールを、小池さんは「実用のテキスタイル」と呼んで愛用しています。

そもそも小池さんが日本の布に惹かれたきっかけは、白洲正子さんの店に置いてあった手織りの布を見たことから。そこには、「間道縞」など細い縞の木綿の布地がたくさん揃っていて、それを買い求めては、洋服に仕立て直して着ていたといいます。仕立て直しをしてくれたのは、洋裁学校を経営していたお母さま。小池さんは生まれたときから、布に囲まれた環境で暮らしていたのです。

そんな小池さんの「布好き」に拍車をかけたのは、旅を通して知った、世界のテキスタイル。小池さんが大切に、旅に連れていくという布を見ていると、こちらまで、世界を旅



人気シェフの店で料理ワークショップに。ロンドンでは、旅人という感覚がない。

しているような豊かな気分になります。インドの古いサリーをパッチワーク風につなぎ合わせたもの。タイの人々が腰に巻いたりストールにしたりもするチェックの木綿布。高原の羊の喉元の毛を集めて紡いだシャトゥージュ。金糸を織り込んだ、サリーとセットの長いストールなどなど。有名デザイナーがラオスで作ったタオルは、スカーフとして使っています。インドでできるものの美しさに魅せられた英国人デザイナーが、インドの職人たちとコラボレーションして生み出したストールもありました。このストールも、デザイナー自身の「長い創作の旅」なくしては、生まれなかったにちがいありません。

1枚1枚の布には、それを作った人たちの思いが詰まっていて、その思いをきちんと受け止めて大切にしている小池さん。だからでしょうか。布を語るときの小池さんは、まるで少女のように輝いて見えます。ストールとの出会いも、それを作る人たちとの出会いも、みんな旅がもたらしてくれたもの。「実用のテキスタイル」と言いながら、布の中に込められた思いと一緒に連れて旅に出かけるのが、小池さんのスタイルなのでしょう。



1_持ち寄ったピースをつないで1点の服を作った、ミラノでのニットの展覧会。2_フライトや行き先、滞在先、連絡先などを入れ込んだ旅程表。その上にあるのは、耳栓。

Q&A	PROFILE
小池一子 クリエイティブディレクター 武蔵野美術大学名誉教授。無印良品創業以来のアドバイザリーボード。編著書に「三宅一生の発想と展開」「空間のアウラ」など。	
1. 旅に何を求めますか？ その土地の日常にある「異文化体験」。	
2. 旅を快適にするための物は？ 自分の耳の形にできる耳栓。機内、旅先で眠るために。	
3. 旅に持って行く無印良品の物は？ 吊り下げて使うポーチ。田舎では木の枝に掛けて使う。	

※質問は以降共通



山歩きの途中で滝や沢を見つけると、入って泳ぎたくなる。滝で泳ぐのは体が冷えるので、日帰りのときだけの楽しみ。

山で自分を空っぽにすると、また頑張れそうな気がする。

旅の中で「自然」とのふれあいを求めるとしたら、その究極は、登山。
学生時代から山に親しみ、医師として仕事に追われる今は
山歩きの心身のリセットをしているという坂田さんに、お話を聞きました。

生まれも育ちも東京の坂田さんですが、子どものころから休みのたびにお母さまの故郷に行き、野山で遊ぶのが大好きだったという自然児。ただ、中学高校は女子校で、野遊びとは無縁な生活が続いていたとか。大学入学と同時に、ごく自然に山岳部に入部したのは、「封じ込めていた虫が動き出したのかも」と、笑います。
今でこそ「山ガール」ブームですが、坂田さんが入部した当時は部員も少なく、女子は一人だけ。男子部員も3歳上と6歳上の先輩が一人ずつ、2年後に後輩がやっと一人、といった状況で、その分、OBや先生から手を取るように、ていねいに教えてもらったといいます。そんな恵まれた環境にあり

ながら、学生時代には、登山を「辛いだけ」と思ったこともあったそうです。

ONとOFFを切り換えるために。

医師になると、夜中に呼び出されるのも珍しいことではありません。ONとOFFを切り換えにぐいだけに、ストレスも溜りがちです。社会人になってから、坂田さんは疲れたとき「山へ行きたい」と切実に思うようになりました。
仕事に就いたばかりのころは休暇も不定期で、急に「明日から休暇をとっていいよ」と言われることも、しばしば。予約して行く旅はできません。急な休暇でも一人で行けるのは、



1



2



3

1_尾根伝いを歩くのは、気持ちよく楽しい。スリムな坂田さんだが、15kg程度の荷物は背負うという。2_ご主人と一緒に登山し、山上で誕生日を迎えた。ご主人からのサプライズは、坂田さんの大好物であるスイカ。内緒で運び、山上でプレゼントしてくれたという。3_お母様、妹さんと一緒に海外の山を歩くことも。



計画ノートや地図など。山歩きの楽しみは、準備の段階から始まっている。

やっぱり山です。長めの夏休みが取れるようになってからは、1週間の山歩きも可能になりました。
とはいえ、1週間の休みを取ろうとしたら、自分がいない間に何が起ころうと大変なようにしておかなければなりません。引継ぎのための準備が大変なので長い休みを取らない、という人もいますが、坂田さんは、引継ぎをすることで自分の仕事を整理できると考えています。出発前、仕事の整理をする段階から、すでにリセットが始まっているのです。そんな準備があるからこそ、帰った後は新たな気持ちで仕事に取り組めるのでしょう。

持てるチカラの3割で行動する。

時には、一人で1週間の山歩きをすることもあるという坂田さん。いくら山岳部で鍛えているとはいえ、たった一人の山中で、寂しくなったり怖くなったりすることはないのでしょうか。「ふだん、ずっと人に囲まれているので、人がいないことでの寂しさや怖さはありません。むしろ、ホッとする感じ」という答。旅には、誰もが「非日常」を求めるものなのでしょう。
そして、危険から身を守り安全を確保するために、「自分が大丈夫だと思う3割しか行動に移さない」というのが、坂田

さんの山歩きの鉄則。午後1時か2時には一日の行動を終えるようにしているのも、そのひとつです。天候によっては、先に進めず、同じ小屋に3日間寝泊まりしただけで帰ってくることもあるそうですが、それも「自然相手だから仕方ない」と思うことに。最初のうちは「やりすぎ」と言われるような無謀なこともしていたそうですが、実体験の中でひとつひとつ学び、「欲張らない」ことを身につけていったといいます。自分をコントロールするという意味で、この感覚は仕事にも生かされているようです。

山の魅力を聞くと、「何も考えずに歩くと、自分が空っぽになっていくようで、ただ、気持ちいい」というシンプルな答が返ってきました。山歩きをすると、体内の水分が総とっかえされて、体が浄化されたような感覚があるのだそうです。また、1週間もフルで歩くと、十分に充たされて「普通の生活に戻りたい」という気持ちにもなるといいます。山には、1週間で人を充たしてくれる濃密な時間と空気が流れているのかもしれません。
1月に結婚したばかりの坂田さん。これからは、週末に半日歩くといったような、普通の生活に溶け込んだ山歩きをしたいと語ってくれました。暮らしや仕事、家族の形態に合わせて、山歩きのかたちも変わっていくのでしょう。

Q&A	PROFILE
坂田 英恵 医師 学生時代、山岳部に入り登山を始める。卒業後も医師として多忙を極める中、休暇が取れると山を歩き、仕事の活力にしている。5月より山形県内の病院に赴任予定。	
1. 心身のリフレッシュ、異文化体験 2. 一日の行動が終わって日没までの時間に読むための文庫本 3. ドライフルーツなどの軽い食品類	





1冊ずつ手作りされた写真集。自分で見て「いい」と思える写真だけを選ぶので、厚さはまちまち。

思い出をカタチにする。そして、旅が完結する。

「旅は3回楽しめる」といいます。準備の段階で、旅先で、そして、帰った後で旅の整理をしながら、もう一度その旅を味わうのが3回め。旅の写真を「作品」にして楽しんでいる中野さんにお話を聞きました。

お邪魔した中野さんの自宅は、目黒川を見下ろすマンションの5階。壁も天井もフローリングも白く塗られ、ソファークバーやお子さんの木馬まで白で統一されたシンプルな空間です。部屋のアロマキャンドルからは、かすかにバニラの香りが漂ってきます。目的のアルバムは、アンティークのベンチの上に置かれていました。中野さんが旅した土地で撮った写真をセレクトし、自分で製本した、オリジナルの写真集です。

フィリピンのカオハガン島から始まり直近のケニアまで、旅先ごとにまとめられたアルバムは全部で8冊。手札サ

イズにプリントして綴じられた写真は、なんとなく普通のものとは違う印象を受けます。聞けば、均等な白枠にならないよう、プリントのときに余白の取り方を指示して、特別に焼いてもらったものとか。1冊の本にしたとき写真がきれいに見えるように、と考えた結果です。

写真集を作る感覚で

旅の記録写真といえば、余白はコメントを書き込むためのスペースだと想像してしまいがちですが、8冊の写真のうち、コメントが書き込まれたものは1枚もありません。「個人的なポストカード、あるいは写真集のような感覚で作っている

ので、コメントは書き込みません」と中野さん。白を基調にした自宅のインテリアに通じる美意識は、この写真集にも貫かれているようです。被写体選びにも、中野さんらしさがあらわれています。風景や動物はたくさん出てくるのですが、人物写真はほとんどありません。逆に多いのは、洗濯物と自転車の写真。「旅人の目線で、ギリギリまで近づけるのが、洗濯物と自転車。その時は特に意識していなかったけれど、後で振り返ってみると、人物そのものを撮るよりリアリティが出たと思う」と語ってくれました。「そのもの」の中に入り込んで行くより、少し離れたところで全体を見るという、中野さんの視点があらわれているのかもしれない。写真をどう並べるかには、もちろん、グラフィックデザイナーとしての感覚が活かされています。製本は、中野さんの言葉を借りれば「まったくの素人」だとか。「試行錯誤しながら工夫して仕上げた」と笑う姿からは、クリエイターらしい「仕事のノリ」で、楽しみながら作っていることがうかがえます。

旅先の素材やイメージで表紙を作る。

航空券、シール、旅先の文房具屋さんで買った折り紙、買い物をしたときに付いていたアクションなどなど。表紙には、その旅で手に入れた素材が使われていました。航空会社の荷物タグやサファリの説明書もあります。一方、素材そのものは旅先で手に入れたものではないけれど、その国をイメージして作る表紙もあります。北京は赤一色で。チュニジアの旅は砂漠をイメージして、帰国後にサンドペーパーのようなざらざらした質感の紙を探して作ったものとか。それぞれの写真集に、1点1点のこだわりが反映されているのです。



よく登場する洗濯物と自転車。人は写っていないのに、生活を感じさせる。

ひとり旅が多いという中野さん。気の合った友だちと行くこともあります。その場合も、同行者は一人だけと決めています。「二人旅なら、お互いの興味が違ってもそれぞれ自分の好きなことができるけれど、3人以上になると多数決になってしまい、自分の好みだけでは動きにくくなるから」というのが、その理由。旅先では誰にも縛られることなく、心も体も解き放つ。そんな中から切り取った旅の風景が、写真に存在感を与えているのでしょう。



旅先で手に入れた素材で作った表紙。それぞれの国の空気が伝わってくる。

できあがった作品は、たまに人に見せることもあります。基本的には、作ること自体を楽しむもの。「旅が終わってからも、こういう楽しみがあるので嬉しい」し、「写真集ができあがって、初めて、旅が完結する感じ」なのだそうです。終わった後の「作る」ことまでひっくるめて、旅をまるごと楽しんでいる様子がうかがえました。

Q&A	PROFILE
中野 有希子 アートディレクター ファッション・音楽関係の仕事を中心に手がける。現在は1歳10カ月の有莉ちゃんとの時間を大切にすため、仕事をセーブしながら子育てを楽しんでいる。	
1. 行き先によって、求めるものは変わる。	
2. 使い慣れた薬。飛行機で体調を崩さないためのマスク、スカーフ、うがい薬	
3. 小分けのスキンケア用品、化粧ポーチ	





モンゴルの見渡す限りの大草原。「何もない」と感じるか、「草の海と大空がいっぱい」と感じるかは、旅をする人の感性次第。

ペダルを漕ぎながら、道々の出会いと自然を楽しむ。

旅には「点」と「線」があり、目的地に辿り着くまでの線上に本当の面白さがあるといます。線を楽しむために世界各地を自転車で旅し、「自転車は発見の足」と語る丹羽さんに、お話をうかがいました。

「自転車で世界を旅する」と聞くと、なんだかハードルが高そうな気がします。ましてや、アフリカ、チベット、アンデス山脈までも自転車で走ると聞けば、かなりの身体能力を要求されそう。そんな不安を口にしたら、「普通に自転車に乗れば大丈夫」という言葉が返ってきました。「自転車は冒険の足ではなく、発見の足」なのだそうです。

暮らしがあるから、道がある。

丹羽さんが旅でもっとも大事にしているのは、「どんな人に出会ったか」ということ。そのためには、「道」が重要なポイントになります。どんな道が続いているのか、そこからどんな風

景が広がり、どんな人たちが、どんなものを食べて、どんな暮らしをしているのか…その興味を満たしてくれるのは、大きな幹線道路からちょっと離れた裏道です。そこには、点々と村があり、畑があり、「ふだんの暮らし」があります。生身の人間がそこにいて、話しかけると答えてくれる。食べものを差し出してくれる。時に「泊まっていけ」と言われることもある。そこには、「点」をめざして通過する旅にはない出会いとふれあいがあり、そんな中で、その土地の本当の姿が見えてくるといいます。そして、そのための最適の手段が自転車なのです。街の中心部から5kmも離れると、その土地の「ふだんの暮らし」があるといいます。5kmの移動は、自転車を使えば簡単にで



ペルーのアンデス山中の村を通過。現地の暮らしに、ちょっとお邪魔する。

きる距離。そして、自転車は、地球上のほとんどの地域にある手軽な交通手段です。自転車なら、車の入れない道だって楽々が入っていきます。立ち止まりたいところで、いつでも途中下車できます。丹羽さんのツアーでは、「お茶ください」といったような言葉を現地語でTシャツにプリントしておき、それを着て走るのだから。コミュニケーションのきっかけにするためです。まず近づいてくるのは、子どもたちです。その近くでは、お年寄りがごく普通にお茶を飲んでいます。自転車に乗っていることで「通り過ぎていく旅人」だとひと目でわかるから、相手もあまり警戒心を持たずに、心を開いてくれる。だからこそ、つかの間の出会いを楽しめるといいます。自転車での旅は、人と出会う旅。人の生活圏にちょっとだけお邪魔して、その暮らしを垣間見させてもらう旅です。それ



ネパールの山奥の村で。子供たちは乗ったことのない自転車に目を輝かせる。

は、海外への旅に限ったことではありません。東京の下町を巡る半日のツアーでも、丹羽さんはまったく同じ意識で自転車を走らせ、短い「旅」をするのだそうです。

体いっぱい、自然を感じる。

自転車の旅のもうひとつの魅力は、自然の中に「身をさらして」走ること。空気、風、陽射し、温度、音、ニオイ…五感をフル稼働させて感じる世界です。楽しんで乗るか仕方なく乗るかで、見えるものや感じられるものは大きく変わってきます。モンゴルの草原では、100mごとに変化するハーブの香りに驚いたことがあるとか。そして、海外に行けば行くほど再認識するのが、「日本の美しさ」です。四季折々に変化する自然の繊細な美しさや水質のよさは、日本ならではのもの。田んぼに水を引く米作りの仕組みなど、緑を生かし、同時に緑に生かされている日本人の暮らしを感じ取ることができます。「ヒマラヤもいいが、日本の農村も、東京の街の中も面白い。いつも、いま走っているところが一番印象的」という丹羽さん。「その瞬間が楽しいから、自転車で旅に出る」という言葉通り、心の底から自転車の旅を楽しんでいる様子がうかがえます。自然の中に身をさらしながら、行く先々の土地で、ありのままの暮らしや人とふれあう。自転車の旅に、旅の原点を見つけたような気がしました。

にわサイクリングツアーズ

東京の路地裏からチベット、アンデスやアマゾン、サハラ砂漠まで、週末は地球上のどこかを自転車でガイド。http://www.ncycling.com



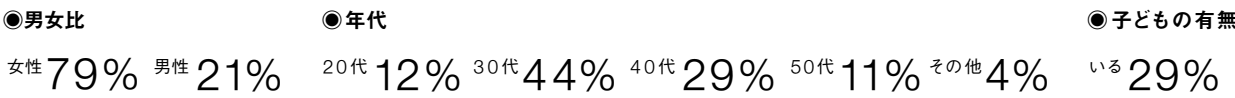
Q&A	PROFILE
丹羽 隆志 にわサイクリングツアーズ主宰 アメリカ、モンタナ州のアウトドアスクールのスタッフを経て、帰国後、サイクリングツアーを開始。テレビ出演や多数の著書を通して、自転車の楽しさを発信している。	
1. 人との出会い・異文化体験 2. 荷物は少なく、持って行くのは好奇心だけ。 3. 特になし	



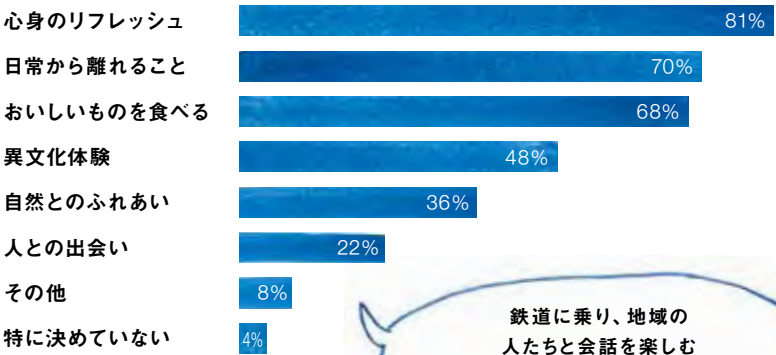
旅についてのアンケートレポート

ひと口に旅といっても、観光、慰安、探訪と、その目的はさまざま。
添乗員が案内してくれるツアーがあれば、帰る日取りも決めていない自由な旅もあります。
仕事で行かなければならない場合もあるでしょう。
今回は、仕事以外のプライベートな旅の楽しみ方について聞きました。

「私だけの旅の楽しみ方についてのアンケート」2011年2月実施 2698名参加



旅に一番求めるものは？



鉄道に乗り、地域の
人たちと会話を楽しむ

ノルウェイから来たご夫婦とホテルのロビーで一緒になった。身振り、手振りで、それぞれの国の良さを教えあい楽しいひと時が過ごせた。言葉が通じなくても、気持ちは通じ合えることが実感できた。

— 男性 60歳以上 既婚 —

家族と過ごす大切な時間

共働きで毎日忙しい日々を過ごしているので、家族みんなでゆっくりして思い出をたくさんつくる大切な時間。

— 女性 30代 既婚 子ども2人 —

男女を問わず、多くの人が「心身のリフレッシュ」「日常から離れること」を挙げています。「異文化体験」「人との出会い」は20代前半の人や学生、他、クリエイティブ系、フリーランスで仕事をしている人が多いのが特徴です。

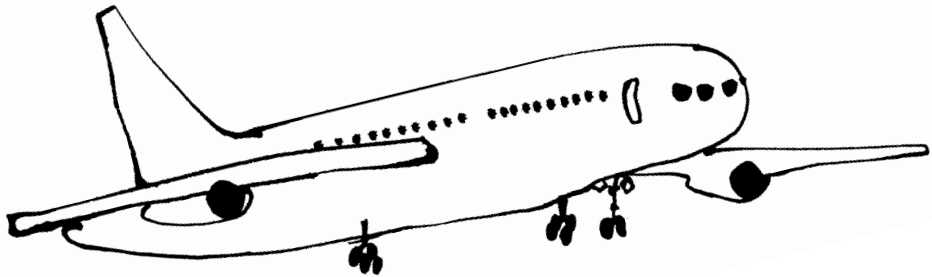
旅を快適にするアイテムは？

- 機内で
- 1位 デジタルカメラ
- 2位 ガイドブック
- 3位 本
- 4位 菓子・飲料
- 5位 薬

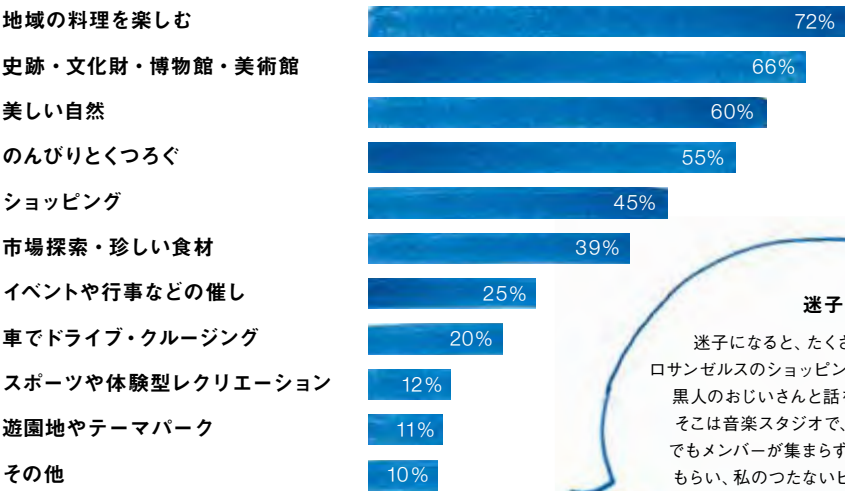
デジカメ、ガイドブックなどが上位ですが、長時間のフライトには、羽織りものやネッククッション、耳栓、アイマスクなどを持ち込む人も多いようです。乾燥した機内では、マスクも必需品。小さな子ども連れの場合は、子どもが飽きない工夫として、おやつ、おもちゃ、お絵かき道具などをすぐ出せるようにしておくのも大切です。

- ホテルで
- 1位 充電器
- 2位 化粧品
- 3位 スリッパ（サンダル）
- 4位 好みの石けん・シャンプー類
- 5位 ドライヤー

乾燥対策として携帯型加湿器、香りを楽しむために入浴剤を持って行く人もいます。旅先での洗濯には、シャンプーや固形石鹸を使う人がいる一方、洗濯洗剤を持って行く人も3割います。干す道具は、洗濯ロープの他に、ピンチ付きの小型物干しが人気。ドライヤーを持って行く人が多いのは、使い慣れたもののほうが髪を整えやすいでしょう。



旅の主な楽しみは？



「地域の料理を楽しむ」は、男女を問わず20～30代に多く、50～60代は「美しい自然」が多くなっています。「のんびりとくつろぐ」は20代前半に断然多く、反面、30代を中心とした子育て世代は、旅先でもくつろぐことができないようです。

迷子になること

迷子になると、たくさんの出会いと発見がある。ロサンゼルスショッピングモールでジャズを演奏していた黒人のおじいさんと話をして、彼の車でハリウッドへ。そこは音楽スタジオで、次回の演奏の練習場だった。でもメンバーが集まらず、彼のサクソなどを聞かせてもらい、私のつたないピアノと一緒に演奏してくれた。

— 女性 20代 既婚 —

旅のトラブルも、
思い出になる。

当時の恋人に婚約破棄されて、友人と行ったハワイ傷心旅行。ノースショアへ行った帰り、ローカルバスの中で出会った現地の親子連れ。決して裕福そうな外見ではなく、母親は私と歳が変わらないくらいで、子供は3人。真ん中の子は片目が不自由なようでした。けれど3人ともしごく仲が良く、私たちに一生懸命話しかけてくれてその健気さに心が洗われ、失恋なんて大したことないって思えました。何よりも元気がもらえた思い出です。

フランス南部の村からニース空港行きの長距離バスに乗り、もうすぐ空港という高速道路上の地点で、バスの後部座席付近から黒煙と悪臭が…。急いでバスを路肩に退避させ、乗客は降りましたが、荷物が出せない。勇気を出して荷物を取りに行きました。無事取り出せたものの、その後、バスは爆発炎上。暑さのせいで、よくあることらしいのですが、とっても怖かったです。ドイツの高級車のバスですが、暑さだけで爆発するなんて、考えられないことです。

夜中、道に迷って海岸線をひたすら車で走ったときに見た、月あかりの世界。海に反射してきらきら、山の輪郭をうつしてきらきら。困っていたけれど、あんまりきれいなのでこのままでもいいと思ったほどでした。

メキシコの建国記念日に、たまたまトランジットで一泊。小麦粉や穴あけパンチのクズを掛け合う祭りで、帰国前夜というのに、頭からジーバンの折り目、服のままで粉が溜まりに溜まって大変だった。楽しかったけど。

音を求めて——無印良品の旅

無印良品では創業当初から独自の店内音楽を制作し、10年前からはお客さまのご要望にお応えして「BGM」CDの販売も始めました。テーマは、何十年、何百年も生活の中で愛されてきた音楽。暮らしの中から生まれ、親から子へ、ベテランの演奏家から若い演奏家へと受け継がれてきた音楽です。祭りや祝い、家族や友人の集いの席で人々の思いを表すために演奏され、時には厳しい生活を支える心のよりどころにもなりました。生活音楽とは、自分と共に生き、さらなる進化をとげるもの。Living Tradition(今を生き続ける伝統)なのです。それは時代に左右されない「安心」であり、そのまま無印良品の「思い」とも通じます。そんな思いを携えて、世界各地のミュージシャンとコラボレーションの旅をしています。

“地の果て”で出会った、ケルトの心。

ロンドン、ヒースロー空港から車で5時間。グレート・ブリテン島最西端に位置し、ランズ・エンド（地の果て）と呼ばれるコーン・ウォールには、ケルト文化がいまなお根強く残っています。紀元前1500年から現れたケルト系民族は、共通の宗教と文化をもち、紀元前400年には中央アジアからヨーロッパ全土、アフリカの一部までをその影響下ににおいた集団。その音楽は独特な旋律や和音構成に新鮮な響きがあり、映画『ロード・オブ・ザ・リング』の主題歌にもなったエンヤの楽曲でご存じの方も多いでしょう。私たちの旅の目的は、コーン・ウォールの伝統的なケルト音楽を、現代のミュージシャンの演奏で収録することでした。

レコーディングは、コーン・ウォールのセント・メリーンにあるミュージシャンの
プライベートスタジオを借りて行われました。軍の飛行場跡地の古い建物を
利用して造られたそのスタジオは、簡素だけれど持ち主の愛情を感じさせる良い
雰囲気を持っています。

初日、スタジオ・ブースの音がコンソール・ルームに返された瞬間、力強いケルト・サウンドが響きわたりました。私たちの探していた音です！ 歌声の主はバート（ケルトの吟遊詩人）と呼ばれる、ヒラリー・コールマン。鬱蒼とした森と原野におおわれていたころのコーン・ウォールを思い起こさせます。ケルト音楽は、母神信仰、大地信仰、アニミズム（精霊信仰）に支えられた、母なる音楽。気負いもてらもなく、地のまま、そのままに、家の暖炉のそばで家族や親しい友人達のために唄っているようなヒラリーの歌声は、大地の力強さとそよ風のようなやさしさ、そして子供を叱るような厳しさで、まさにバートそのものです。

「ランチは食べないの？」スタジオに突然大きな声が響きました。レコーディング中の食事を一手に引き受けてくれる若き肝っ玉かあさん、サマンサが食事を知らせにきたのです。スタジオのある小さな村には6軒の商店があるだけです。食事、サマンサがスタジオ内でとることにしていました。いつもニコニコ顔のサマンサがわざと怖い顔をしているのを見て、全員そそくさとダイニングへ向かいます。

ある時、サマンサはスタジオのオープンの調子が良くないからと、わざわざおばあちゃんの家までパイを焼きに行ったことがありました。「スタジオの食事だから、なんでも良いですよ」と言うと、「ありがとう。でも、ちゃんとしたものを食べてもらいたいから」という返事。ちゃんとした食事が人を幸せにし、自分がその



ボーカルの低音部を受け持ったミッシェル。素朴で気高く、映画「キング・アーサー」の王妃を彷彿させる。



小さな頃から家族と一緒に世界各地を旅してきたサマンサは、世界中の料理を作り、その腕前はピカイチ。



幸せを作れることが、サマンサの楽しみなのです。大切な人のために自分のできる最大の努力をするのが、サマンサの哲学。各地を転々としてきた彼女は、〈平穏な生活の大切さ〉という人生の答えを知っているのです。そしてミュージシャンも、レコーディング中でも、みんなで楽しそうに食卓を囲みます。「生活の中の音楽」もそういうものなのだと、いまさらにように気づかされました。

いまのコーン・ウォールに、荒涼たる大地や深い森といったケルトの原風景を見つけることはできません。でも、コーンウォール・ケルトは、より純粋さを増して、人の心の中にありました。素朴さと強さ、日々の生活をていねいに過ごすこと。ぎすぎすした現代社会においてケルト文化が好まれるのは、そんなケルト的暮らし方へのあこがれなのかも知れません。

- ☐ Paris / BGM2
 - ☐ Sicilia / BGM3
 - ☐ Ireland / BGM4
 - ☐ Puerto Rico / BGM5
 - ☐ Andalucia / BGM6
 - ☐ Scotland / BGM7
 - ☐ Stockholm / BGM8
 - ☐ Napoli / BGM9
 - ☐ Buenos Aires / BGM10
 - ☐ Hawai / BGM11
 - ☐ Paris / BGM12
 - ☐ Rio de Janeiro / BGM13
 - ☒ Cornwall / BGM14
 - ☐ Puraha / BGM15
 - ☐ Beijing / BGM16
- 5月中旬発売
- 各1,050円(税込)



MUJI to GOは、旅や機動性に重点を置いたサービスをセレクトした無印良品。移動やビジネスに役立つ商品の紹介や、「世界時計」「為替」「天気」「電卓」などの情報サービスを提供します。



時刻：世界各都市の時刻を画面に追加／削除して、あなただけの世界時計一覧を作ることができます。



天気：世界各地の5日間の天気を画面に表示できます。追加／削除も可能です。



電源：世界各国で使用されているコンセントの形状と、それに合うプラグの形を調べることができます。

為替：世界の通貨を現在のレートで表示でき、追加／削除も可能です。通貨換算での計算もできます。

電卓：計算結果を大きく表示し、計算履歴を見ることが可能です。

調べる・探す：Google検索をするための機能を簡潔にまとめました。

i Pad アプリケーション

価格：無料

動作環境：iPad
互換 iOS3.2以降が必要
言語：日本語、英語、フランス語、スペイン語、中国語

◎ 画面の上部では、旅行や移動をより快適にする無印良品のアイテムを、それぞれの機能に合わせて紹介します。

◎ それぞれの機能は、スワイプで簡単に切り替えることができます。